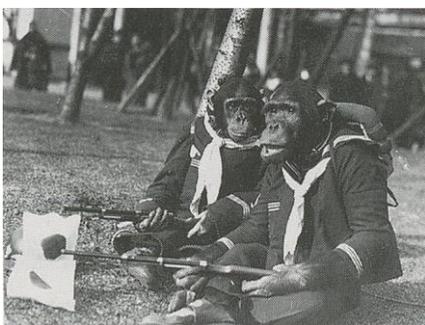


動物園ってなに？

動物園の歴史をたどると、一番最初は王様などえらい人たちが、自分の「偉大さ」「すごさ」を自慢するため、珍しい動物をコレクションしていたのが始まりと言われており、今から3000年ほど昔のエジプトやインド、中国などで記録が残っています。その後も、動物園は王族・貴族など限られた人のための娯楽、楽しみの場所でした。そのうち、ただの「見世物」ではなく、動物について学び、研究し、また保護するための施設にすべきという考え方が広がり、1828年イギリスに作られたロンドン動物園はロンドン動物学会の研究資料収集施設として創設された、世界で最初の「科学的動物園」と言われています。動物園は、英語では正確には zoological garden(s)「動物学的庭園」と書き、それを縮めた略称が「ZOO」です。



日本で初めての動物園は「上野動物園」で、当時上野に移転した博物館(後の東京国立博物館)の附属施設として1882年に開園しました。



戦争に利用された動物たち

第二次世界大戦の中で、日本の動物たちは軍服を着させられたり、防災訓練に参加するなど、戦争に協力させられました。そして、「空襲でオリが壊れて、猛獣が逃げ出したら危険だ」と、動物園の動物たちを殺処分する動きもありました。外国でも、イギリスやドイツ、アメリカなどでおこなわれました。「戦時猛獣処分」といいます。上野動物園では盛大な慰霊祭が行われ、当時の新聞には、動物たちが「時局捨身動物」、つまり戦争のために命を捧げてくれたというように描かれ、また、「敵をやっつけて動物の仇をとろう」という記事も書かれました。

「虎も獅子も、もろもろの猛獣一蓮托生、み仏の袖の下、極楽浄土の本願をする、あの世で永年お世話になった坊ちゃん、嬢ちゃんのため、健気にこの決戦を戦い抜かうとする少国民のために健やかな成長を祈るのであらう」

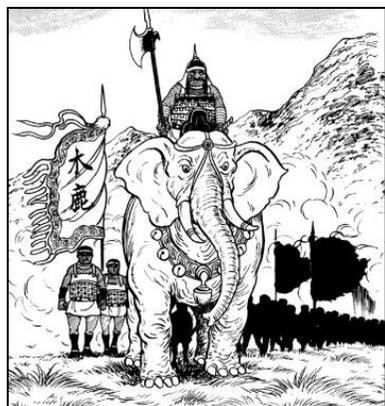
(「戒名は『時局捨身動物』/けふ関係者が集って慰霊祭」『毎日新聞』1943年9月5日)

動物園のけだものがしんでかはいさう、もう、もうじゅうはゐないんださびしくつてたまらない、ぼくが大きくなつたらね、アメリカ、イギリスをぶつつぶす、ライオンたちのかたきを、きつととつてあげませう

(「象さん、仇はとつてやる」/命捧げた猛獣にヨイコの決意『朝日新聞』1943年10月5日)

人間と動物と戦争と

人間と動物の関わりは長く、それは戦争の歴史とも重なります。特に馬は兵士を乗せるにも武器を運ぶにも重宝されました。源平合戦の「倶利伽羅峠の戦い」では、牛の角にたいまつを付けて突進させるという場面が描かれており、「三国志演義」でも戦場に象が登場しています。



優れた嗅覚による探索や、偵察・伝令として使われた犬、今のようにインターネットも電話もない時代は伝書鳩も戦場でよく使われました。第二次世界大戦時には伝書鳩を多用していたイギリスに対し、ドイツは鷹を使って鳩を襲わせたという記録が残っています。

また、アメリカではコウモリの体にナパーム弾を取り付けた「コウモリ爆弾」のテストが行われたり、旧ソ連では犬に爆弾を背負わせるという作戦が実際に行われました。日本では戦時中、ウサギの飼育が国策として勧められました。育てたウサギは、軍用品の毛皮の材料、そして食料として献納(軍に納めること)されたのです。



サーカスの歴史

サーカスと言えば空中ブランコや綱渡りなど、人間や動物による曲芸を披露するエンタテインメントで、これも歴史は古代エジプトや、古代ローマにさかのぼりますが、1770年にイギリス「アストリー・ローヤル演芸劇場」で催された



興行が近代サーカスの始まりと言われていています。近代サーカスは曲馬(馬による曲芸や曲乗り)を主軸に発展し、イギリスからヨーロッパ・ロシア・アメリカへと広がっていきました。

日本に初めてサーカスがやってきたのは1864年「アメリカ・リズリー・サーカス」の横浜での興行で、それまでも日本には「見世物」はありましたが、サーカスの「様々な演目を一度に見せる」というスタイルは大きな反響を呼びました。その後、1899年に設立された「日本チャリネ一座」が、日本人による最初のサーカス団と言われています。

そして戦時中、上野動物園が1943年に動物たちを殺処分した同じ年の10月、警視庁は大日本興業協会仮設興行部に対し猛動物の処分命令を出しています。



動物たちの「平和」とは？

「アニマルウェルフェア」という考え方

戦争に利用され、また犠牲となった動物たち。では、戦争さえ無ければ動物たちは平和でしょうか？

1964年に、工業的な効率重視の結果として動物を密集して飼育する等といったあり方に対する批判本「アニマルマシーン」(ルース・ハリソン著)が発表され、家畜の扱いに対して社会の関心が大きく高まり、「アニマルウェルフェア」という考え方が広がり始めました。

1979年、イギリス政府によって設立された独立機関である家畜福祉委員会が「5つの自由」を提案しました。

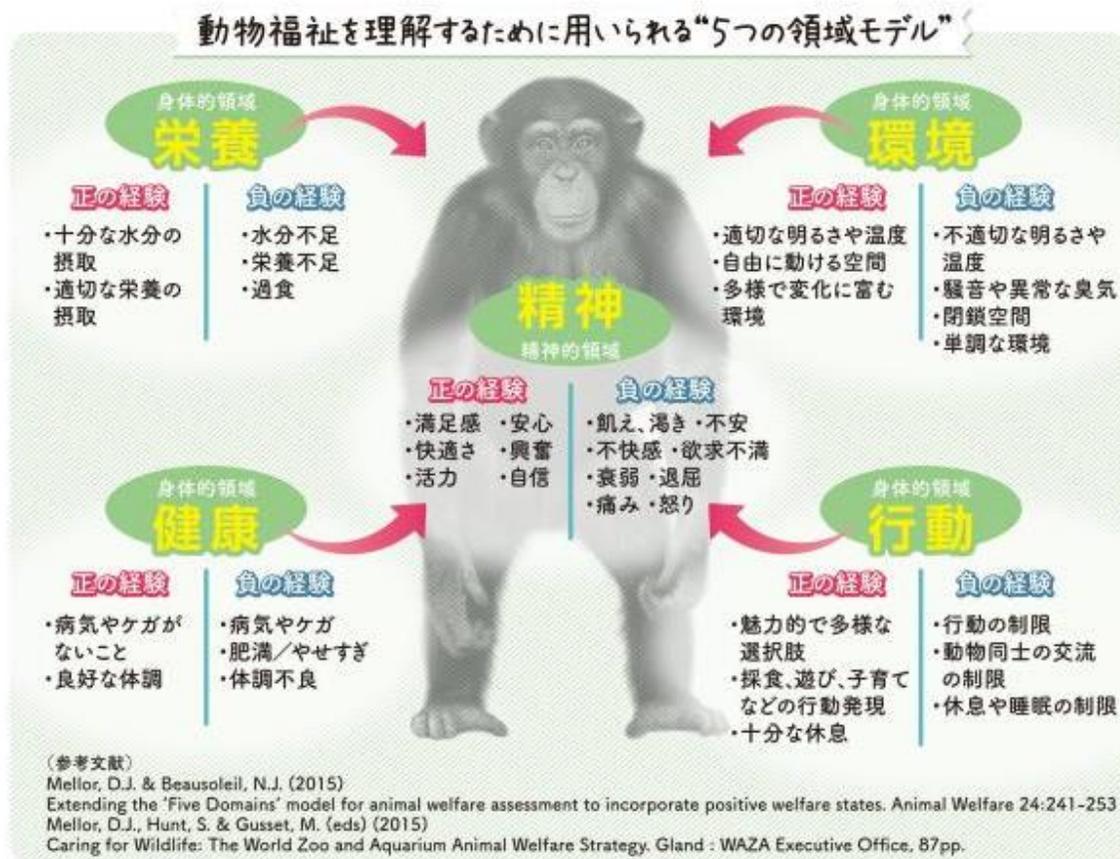
- ・空腹と渇きからの自由
- ・不快からの自由
- ・痛み、損傷、病気からの自由
- ・正常行動発現への自由
- ・恐怖と苦悩からの自由

これは、人間が動物に対して与える苦痛やストレスを最小限に抑えるなどの配慮により、動物の利用自体は認めた上で、動物の環境を改善しようとする考えで、現在EU(欧州連合)では農業部門における最優先課題の一つとなっています。

家畜の環境を改善することで、結果として食の品質など生産性があがることや、畜産従事者の労働意欲向上・離職率の低下が見込めるとして、日本でも農林水産省はアニマルウェルフェアの考え方を踏まえた家畜の飼養管理の普及に努める指針を出しています。

「動物愛護」「アニマルライツ(動物の権利)」との違いは？

「動物愛護」が人間が動物を愛し大切に、人間主体の考え方なのに対し「アニマルウェルフェア」は動物主体です。また「アニマルライツ」は、食料・衣料・実験などへの動物利用を減らし、無くしていくことを目指すのに対し、「アニマルウェルフェア」は動物の利用自体は認めています。



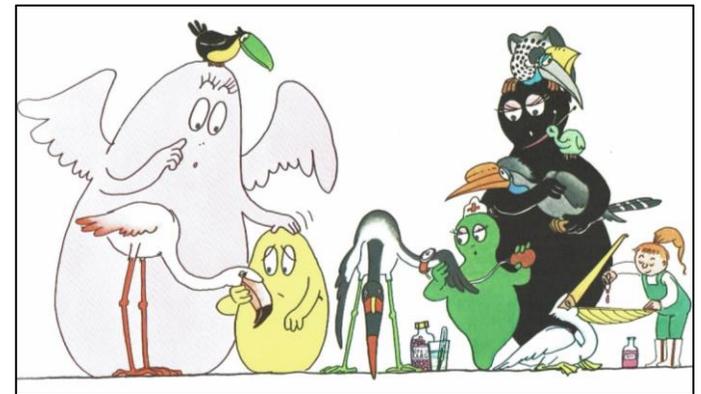
大きく変わりつつある、動物園とサーカスの在り方

動物園には「レクリエーション」「教育」「種の保存」「調査研究」の役割があると言われています。しかし一方で、動物が野生のままに生きる自由を制限せざるを得ないという視点から、動物園のあり方については常に論議されてきました。自然行動をするには小さすぎる囲いの中で暮らしており、大きなストレスにさらされているという研究結果もあります。また、残念ながら動物園を訪れる人のほとんどが「レクリエーション」としてしかとらえていないという声もあります。実際、日本では戦後、市民の慰安として地方自治体運営の動物園が次々と作られたため、専門知識が十分でなく、また経営の観点から興行優先の運営になりがちでした。北海道札幌市では、そうした結果、動物たちを怪我させてしまったり死なせてしまったことへの反省から、2022年にアニマルウェルフェアの向上を掲げた「動物園条例」を日本で初めて施行し、専門知識のある職員の採用、生息地に近い環境を整備するなどの取り組みが始まっています。

合唱構成「ぞうれっしゃがやってきた」では、サーカス団から譲り渡されたぞうが曲芸を披露するシーンが登場しますが、現在はそうした動物園は少なくなっています。水族館での「イルカショー」も、オーストラリアやニュージーランドなど取りやめる国も増えており、隣の韓国では2022年に動物園・水族館関連法が改正され、動物に不要な苦痛やストレスを与える行為が禁止となりました。

動物園そのものをなくした国もあります。日本と同じく憲法で軍隊を持たないと決めた、中南米のコスタリカです。2013年、国内2カ所の動物園を閉鎖し、動物たちを自然に還すことを発表し、2024年に閉鎖が完了しました。コスタリカの環境大臣は「私たちは彼らを救い、または守るためではない限り、彼らを飼育し閉じ込めることはしたくない」と語り、動物尊重と生物多様性保全を訴えました。コスタリカは、国土の4分の1が自然保護区、または国立公園で、これまでも生物多様性保全の政策を進めてきました。2002年には動物を使ったサーカス団の公演を禁止し、スポーツハンティングも禁止しています。

動物を使ったサーカスに対して禁止・制限をする国は世界中に広がりつつあります。「ぞうれっしゃ」に登場する木下サーカスでも現在「アニマルウェルフェア」を掲げ、動物たちのケア、移動の際のストレス軽減などに取り組んでいますが、そもそもサーカスにアニマルウェルフェアはそぐわないという意見も多くあります。そうした動物をめぐる論議の高まりから、動物を使わないサーカスも増えてきました。いずれ、日本でも法整備が進んで、サーカスで動物を見ることはなくなるかもしれません。

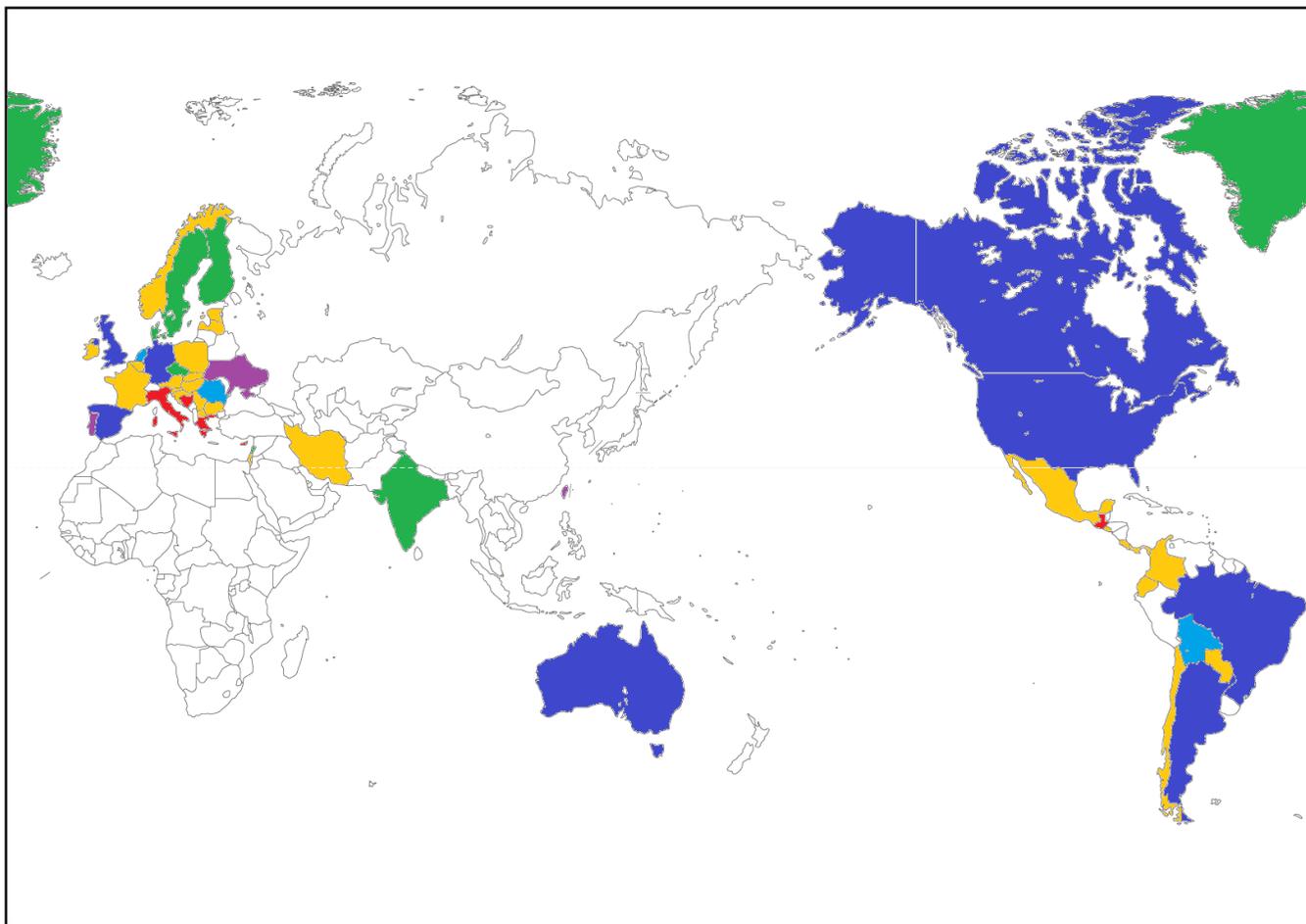


絵本「バーバパパのプレゼント」で、南の国の鳥たちをもらったものの、バーバパパたちが暮らす国は寒くて、もといた場所に帰すことになりました。

それでは、サーカス団の人たちは、動物に愛情を持っていないのでしょうか？ペットを飼っている人たちはどうでしょう？昔は当たり前のよう
に行われていた「奴隷」「植民地」「子どもの労働」「戦争」「大量破壊兵器の使用」などが、今では国際的に違法であると変わって来たように、または
ハラスメントの考え方のように「動物を大切ににする」という考えも「動物自身にとってはどうなのか」という視点が加わり、まだ進歩の過程です。

大切なのは、動物に対しても人間に対しても、「自分以外の生命」に、愛情と同時に創造力・共感力を持つこと。それが、動物たちにとっての
平和、また人類にとっての平和にもつながるのではないのでしょうか。ぜひみなさんもこの機会に、考えてみてください。

【参考資料】サーカスにおける動物使用を禁止・制限している国



全面禁止

ボスニア・ヘルツェゴビナ／キプロス
ギリシャ／イタリア／グアテマラ

野生動物の使用禁止

オーストリア／クロアチア／エストニア
フランス／アイルランド／ルクセンブルグ
マケドニア／ポーランド／セルビア
スロバキア／スロベニア／コスタリカ
メキシコ／イスラエル／イラン／シンガポール
パラグアイ／ベルギー／ブルガリア
ハンガリー／ノルウェー／コロンビア／ペルー
エルサルバドル／パナマ／エクアドル／ラトビア

特定の種の使用禁止

チェコ／デンマーク／フィンランド
スウェーデン／インド／レバノン

一部の動物を除いて禁止

ボリビア／ルーマニア／オランダ
州や都市によっては禁止
ドイツ／スペイン／イギリス／アメリカ
カナダ／アルゼンチン／ブラジル
オーストラリア

動物の輸出入・輸送・訓練の禁止

マルタ／ポルトガル／ウクライナ／台湾